

23. 赤羽遺跡 第2次 -b 調査

1. はじめに

赤羽遺跡は、明石川の支流である伊川の下流域左岸の丘陵西斜面に立地する遺跡である。神戸市西区伊川谷町潤和に東西最大幅約 400m、南北最大幅約 200mの範囲、標高約 19～27mに想定されている。以前より遺物散布地として知られており、平成 11 年度に、共同住宅の進入路と埋設管敷設に伴い、第1次調査がおこなわれている。この調査では平安時代中期から後期の遺構と遺物が確認されている。

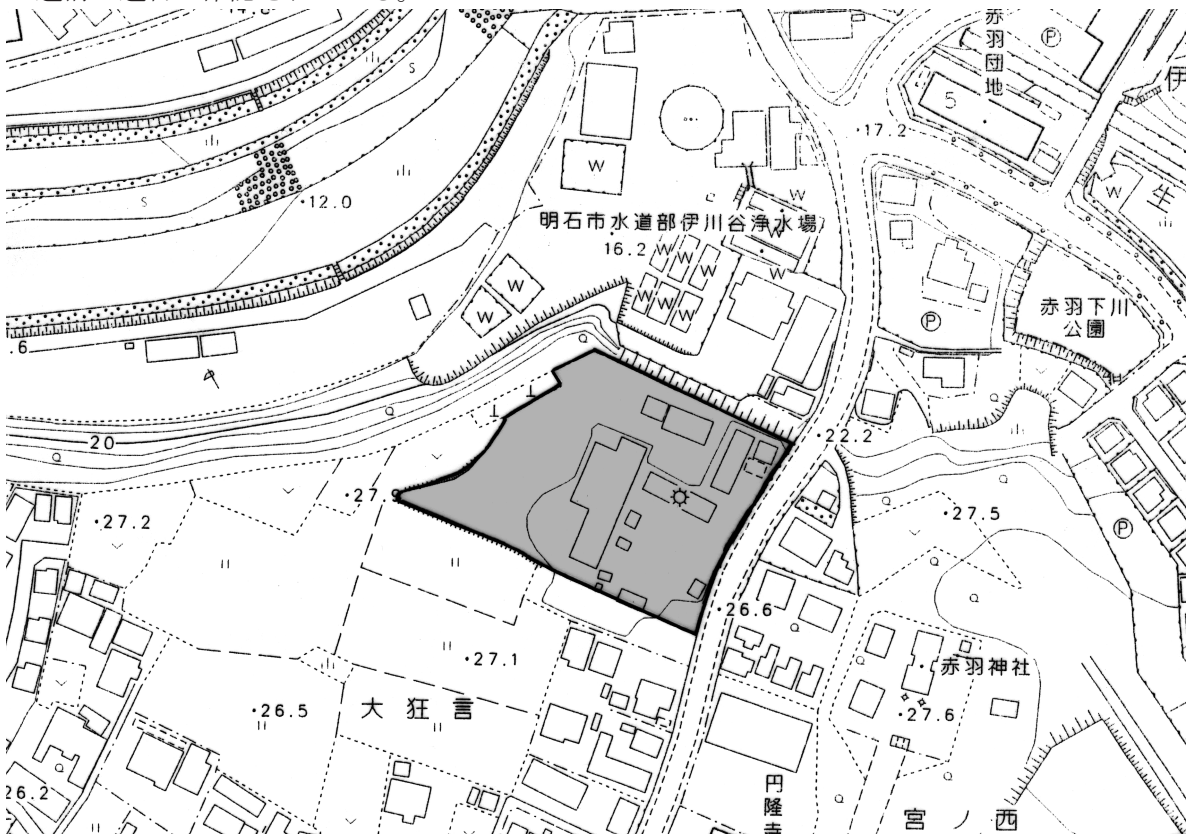


fig.278 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、赤羽遺跡の東隅に位置する最も標高の高い地点であり、近くには土塁と濠が残存し、中世居館と考えられる赤羽神社が所在する。今回は、特別養護老人ホーム建設に伴う発掘調査であり、工事により埋蔵文化財に影響をおよぼす範囲を対象として、平成 26 年度より引き続き調査を実施した。

なお、年度をまたぐ調査のため、先年度調査を2次 - a 調査、今年度調査を2次 - b 調査と表記する。

調査対象地は、以前、工場があったが、調

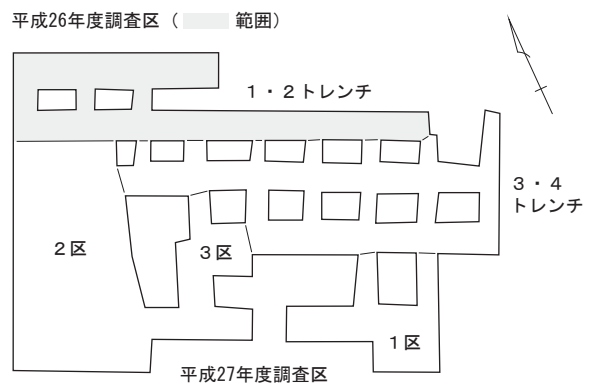


fig.279 調査区配置図

査開始時には従前の建物などは解体除却されて更地の状態であった。調査範囲は、建設工事で設置される杭と地中梁および、その掘形であるため、基盤目状になっている。東西方向のトレンチを北側から1～4トレンチとして設定したが、3・4トレンチ掘削中に遺構が確認できたため、南西の調査範囲を広げることとした。調査を実施する際に残土の仮置き場所を確保するために、調査対象範囲を北部（1・2トレンチ）、中央部（3・4トレンチ）、南部（1～3区）の3つに分けて調査を実施した。そのうち北部は、前年度に調査を終了しており、当年度は中央部と南部の調査をおこなった。

現地調査完了後、土壌洗浄をして臼玉検出作業をおこなった。

基本層序

現地表面は南西でおよそ T.P. 27.5m、北東でおよそ T.P. 27.1mである。現地表面から約 40～80cm は、盛土を含む造成土及び攪乱土であり、その下層には現耕土層、旧耕土層が存在する。T.P. 26.32～26.46mで遺構面の黄灰色粘質土となる。西側では、現耕土直下で遺構面となる。同一遺構面上で、弥生時代・古墳時代・平安時代の遺構・遺物を検出している。基盤層は黄灰～橙灰色礫混じり粘質土である。遺物包含層は確認されなかった。

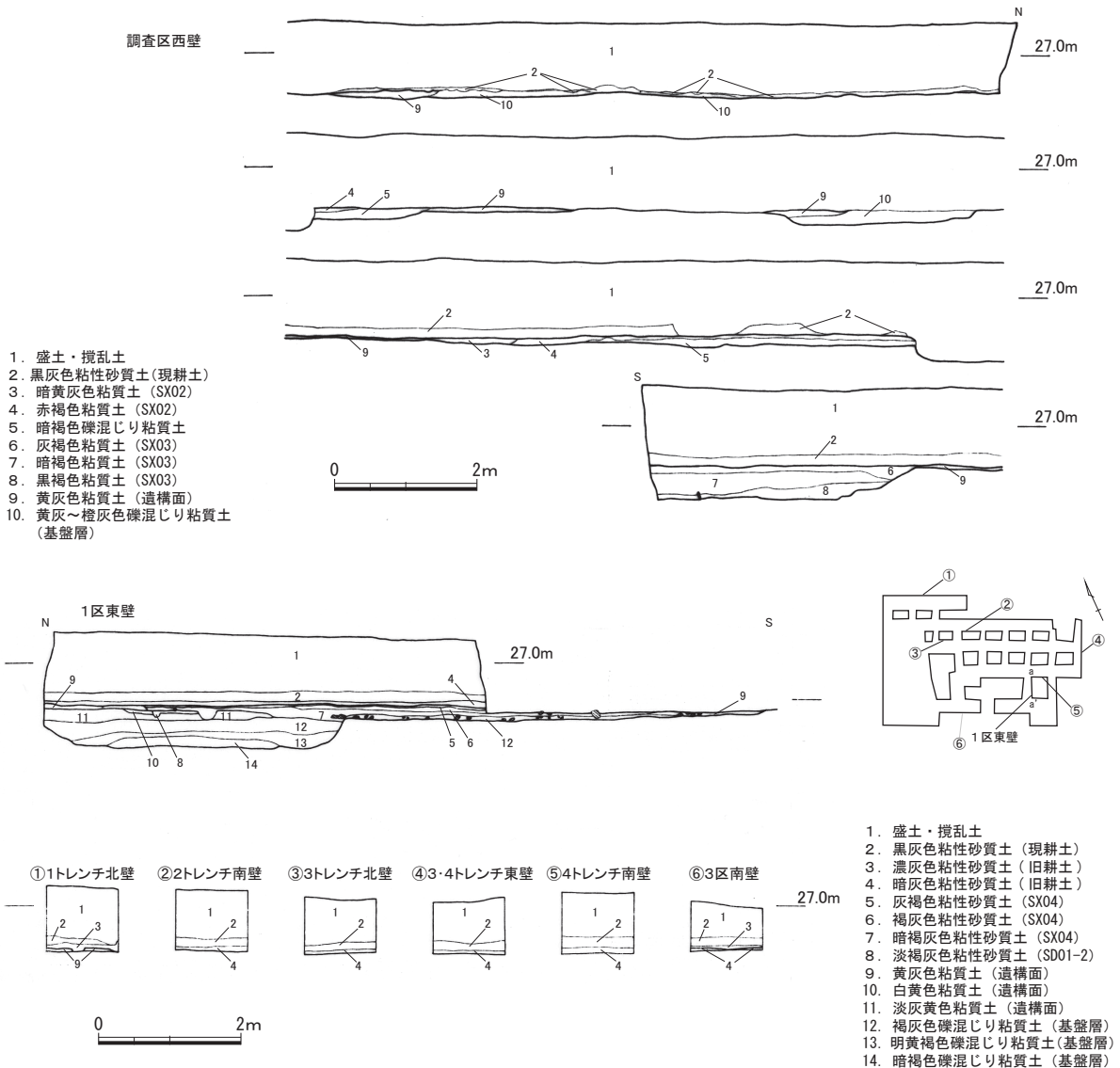


fig.280 土層断面図

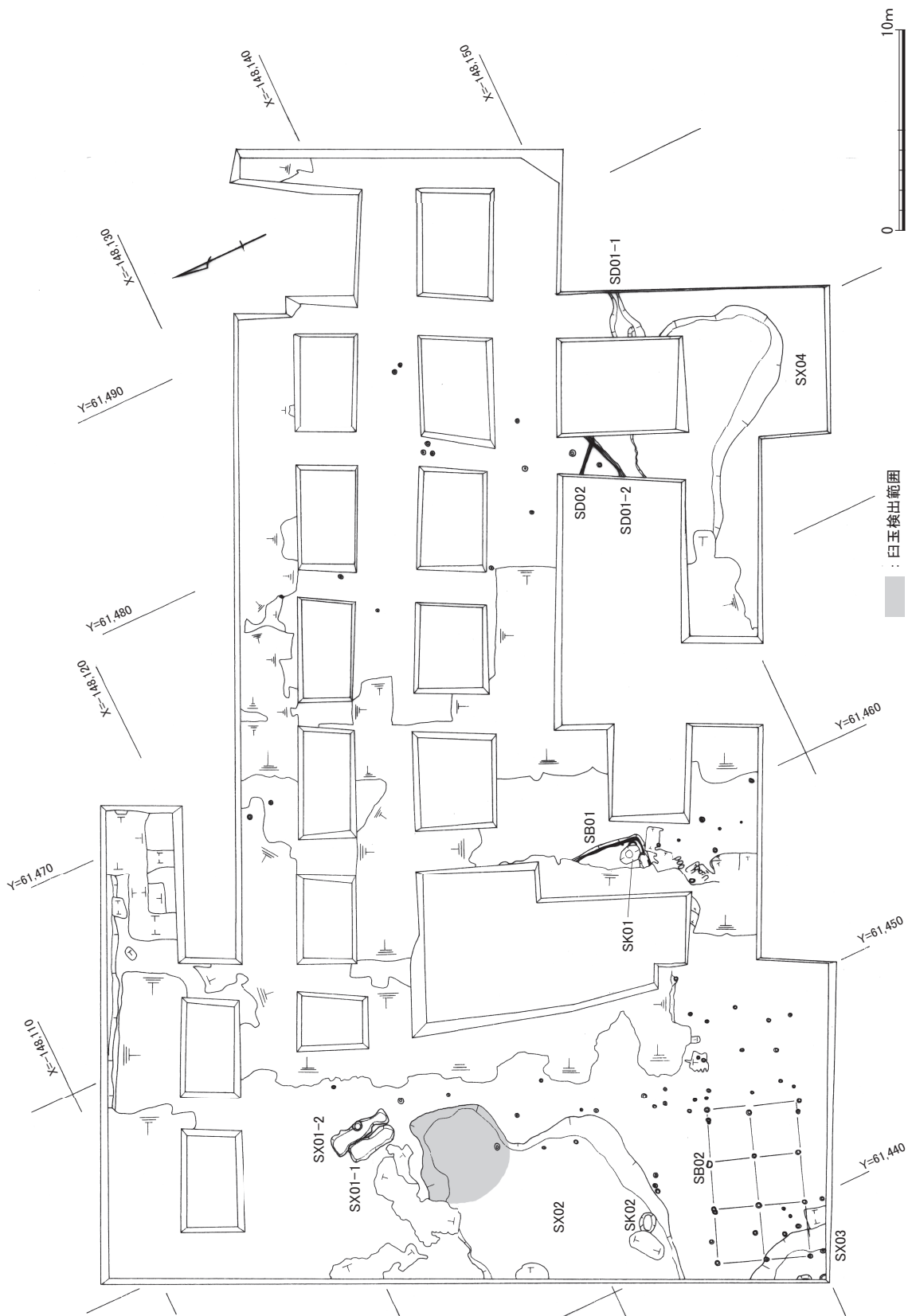


fig.281 構面平面図



fig.282 3～4トレンチ全景（南東から）



fig.283 1区全景（南東から）



fig.284 2区全景（南東から）



fig.285 3区全景（南から）

第1遺構面

旧耕土下の遺構面である。主に、平安時代・古墳時代・弥生時代の遺構を同一面で検出した。遺構は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、落ち込み5基、溝2条、ピット多数を確認した。

調査区中央は従前の建物もしくはその解体時に、大きく攪乱を受けており、遺構面がほとんど残っていない。それに対し西側と東側では、それぞれ現耕土・旧耕土層の下層で遺構面となる黄灰色粘質土を検出した。

1区

SX04 東西最大幅約11m、南北最大幅約6mの不整形な落ち込みを検出した。西側は攪乱により削平されている。埋土である暗褐色粘性砂質土から平安時代、古墳時代、弥生時代の土器が混在して出土した。埋土や遺物の出土状況から、後述するSX02・03と同様の性格が考えられる。

溝SD01 SX04の北側で検出した。幅0.4～2.2mである。東西方向に延び、未掘削部分で寸断されているため、東側をSD01-1、西側をSD01-2としたが、おそらく同一の遺構と考えられる。SD01-2は北側の掘形に沿って、幅20cmの細い溝が掘られている。弥生時代の溝と考えられる。

ピット 調査区全体でピットを多数検出した。東側で検出したピットは直径10～20cm程度である。遺物を伴わないため時期は不明だが、堆積状況から後世の耕作に伴う杭跡と考える。前年度調査（1・2トレンチ）で確認した3基のピットも同様の性格と思われる。また西側で

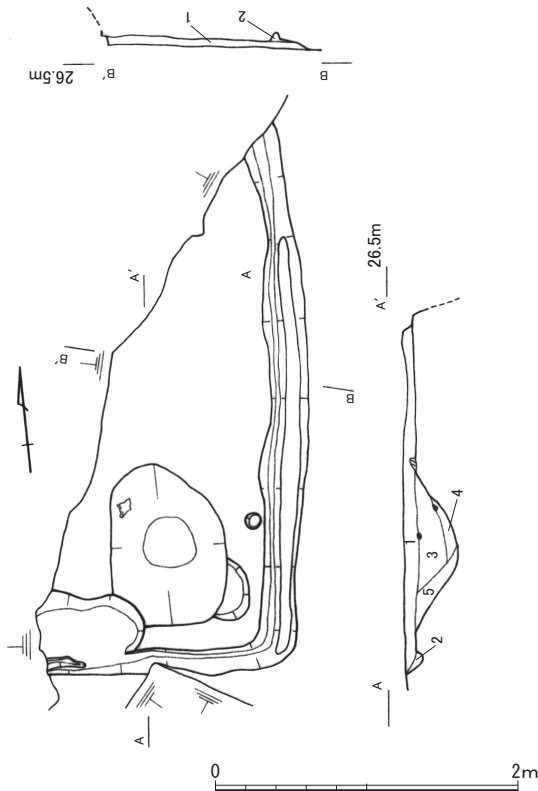


fig.286 SB01 平・断面図

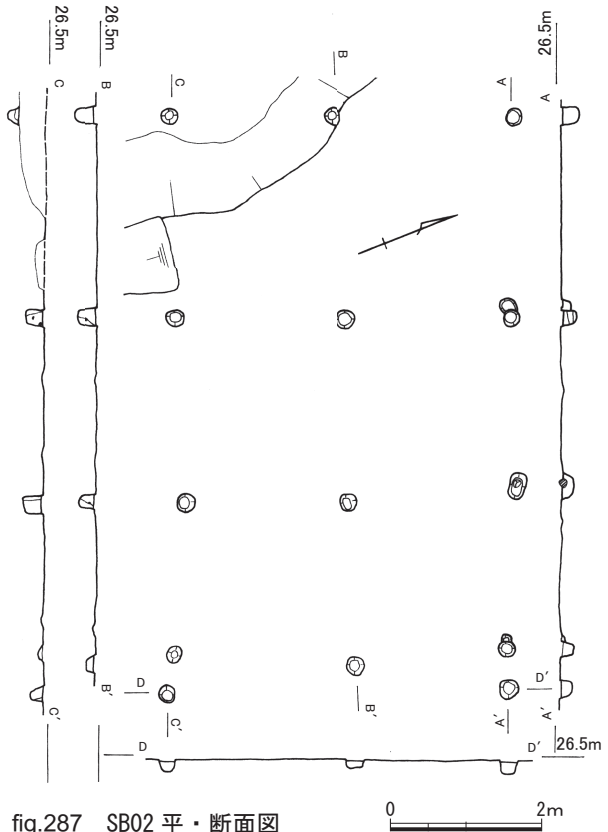


fig.287 SB02 平・断面図



fig.288 3区 SB01 (東から)



fig.289 2区 SB02 (南西から)

検出したピットにも同様の杭跡が含まれると考えられるが、直径 20～30cm ほどのものが多く、平安時代の遺物が出土したものもある。しかし、SB02 の柱穴以外に、建物と推定できるような規則的に並ぶピットはない。

2区

SB02 南西部で検出した掘立柱建物である。検出されたのは東西3間、南北2間であるが、調査区外にさらに延びる可能性がある。柱間は2.0～2.7mであり、柱穴は直径22～36cm、深さ14～32cmである。北東隅と南東隅の柱穴には、それぞれ50cmほど西寄りにピットが存在しており、建て替えの可能性も考えられる。出土遺物から平安時代後期であると考えられる。

SX01-1・2 2区北東に位置する落ち込みで、2つの長方形の落ち込みが切り合っている。堆積状況から、ほぼ同時に掘削され、最終的に埋まったのも同時期と考えられる。わずかに弥

生土器を含むが、性格は不明である。またSX01-2に伴うと思われる直径43cm、深さ30cmのピットを検出した。

SX02 2区中央に位置する広大な落ち込みである。不整形であり、緩やかに落ち込むことから、人工的な掘削ではなく自然地形であると考えられる。全体に弥生時代後期、古墳時代中期の土器が混在して出土した。また北東隅で滑石製の白玉と石製模造品、底部に穿孔のある弥生土器も出土しており、弥生時代、古墳時代に何らかの祭祀がここで行われたと考えられる。SX02は湿地状の地形であり、異なる時期に繰り返し生活が営まれたために、踏込などで土器が混在したと考えられる。

SX03 2区南西隅に位置する。深さ約50cmで、調査区外に広がる。緩やかに落ち込み、SX02同様自然地形であると考えられる。弥生土器、須恵器、石鏃が出土した。

3区

SB01 方形の竪穴建物跡を検出した。西側3分の2程度は後世の攪乱により削平されており、東西最大幅1.7m、南北最大幅3.6mが残存している。建物内の遺構として周壁溝と、南東隅に土坑(SK01)を検出したが、柱穴は確認できなかった。遺物は須恵器の小片が出土しており、古墳時代のもと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では平安時代後期の掘立柱建物、古墳時代の竪穴建物、落ち込み、溝、土坑、ピットが検出された。しかし、後世の耕作により、遺構面は全体的に削平されており、検出した遺構はほとんどが浅い状態であった。

赤羽遺跡の西に古墳時代後期、平安時代の遺構・遺物が多く出土した寒鳳遺跡があり、赤羽遺跡1次調査でも、平安時代中～後期の遺構・遺物を確認していた。これらと同時期の遺構が今回の調査でも確認されたことから、遺跡全体に平安時代の集落が広がっていることが想定される。

また、今回の調査で古墳時代中期、弥生時代の遺構・遺物を確認し、これらの時期の集落が調査地周辺に存在することが明らかになった。さらに、自然地形の落ち込みSX02の北東隅において、白玉を多数検出した。現時点で1312点を数え、今後の整理によってさらに増える可能性がある。石製模造品は勾玉1点、不明品2点も含まれ、古墳時代中期に祭祀がおこなわれたことも判明した。白玉は、検出範囲の中では北西にかたまって分布しており、そのあたりを中心に祭祀がおこなわれたと考えられる。

白玉の形態として、円筒形、中膨形、扁平形、小形の主に4つにわけられる。色調は、濃紺色系、濃緑色系、淡緑色系、橙灰色系、灰白色系、白色系に大別できる。全体の法量として外径3.5～6mm、厚さ1～4mmのものが多く、小形のものには灰白色系・白色系が、中膨形は濃緑色系が比較的多い。扁平形としたものの中には、もともと厚みがあった白玉が石材の剥離により薄くなったものも含む可能性がある。色調別に法量や形態の指向はあまり見られないことから、選択的に石材を使用していた可能性は低いと考えられる。



fig.290 2区 SX02 (南から)

24. 出合遺跡 第50次調査

1. はじめに

出合遺跡は、明石川中流域右岸に広がる遺跡である。地形的には明石川本流右岸の沖積地上と、その西方にあたる洪積段丘上に二分される。沖積地上では、竪穴建物をはじめとする弥生時代前期～古墳時代初頭にかけての遺構・遺物に加え、平安時代後期～鎌倉時代前期の掘立柱建物や木棺墓などが確認されている。段丘上では、古墳時代中期～後期の古墳群や初期須恵器段階の須恵器窯（出合窯）、奈良時代・平安時代後期の掘立柱建物などが確認されている。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を行ったものである。その結果、弥生時代後期～古墳時代、および中世に属すると考えられる遺構・遺物を確認した。

掘削残土置き場を確保するため、調査区の西2/3を1区、東1/3を2区とし、1区より調査を開始した。また、掘削深度が2mを超えることが予想されたため、掘り下げに際して45°の法面勾配、および深さ1m地点に幅50cmの平坦面を設け安全確保を図った。

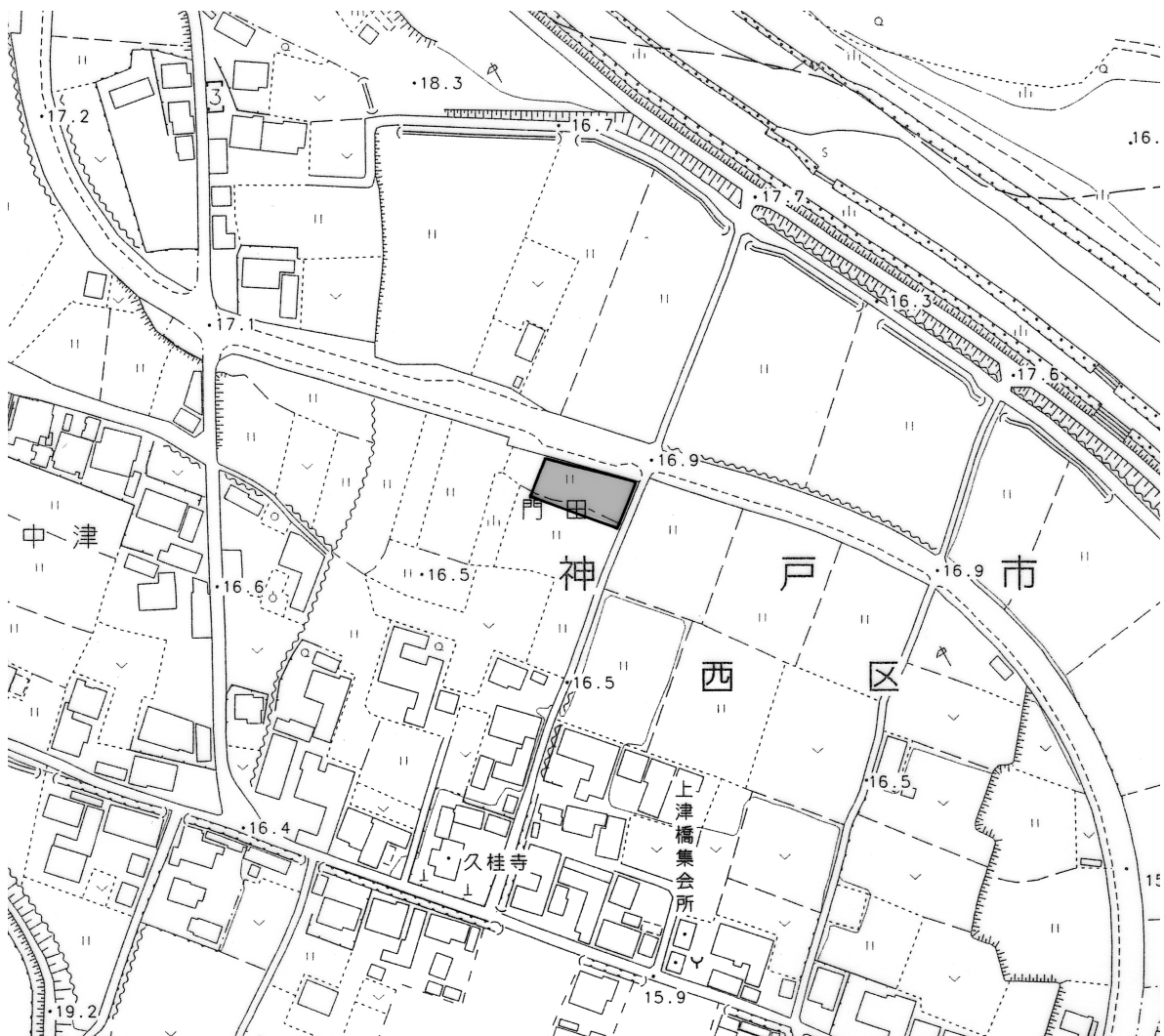


fig.291 調査地位置図 1:2,500

基本層序

現地表面の標高は約 17.8mを測る。深さ約 2mまでは宅地造成による盛土（1層）である。それ以下では、旧耕土である灰色細砂・黄灰色細砂～シルト（2・3層）が約 20 cm堆積する。旧耕土直下の暗灰褐色シルト（12層）上面が第1遺構面となり、標高は約 15.7mを測る。この12層は弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層でもある。

第1遺構面からさらに 10～20 cm程度掘り下げた段階で、複数の遺構が確認されたため、これを第2遺構面として遺構検出を行ったが、第1遺構面から第2遺構面への層位は漸移的であった。それ以下では灰褐色シルト（14層）、黄褐色極細砂（15層）と続くが、下層の確認状況および既往の調査成果より、第3遺構面までの掘削深度が3mを超えることが予想されたため、安全面を考慮し掘り下げを停止した。

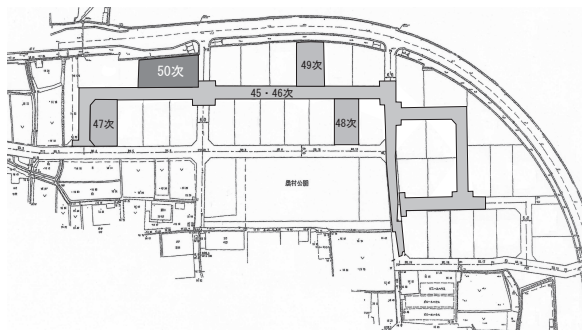


fig.292 調査地配置図

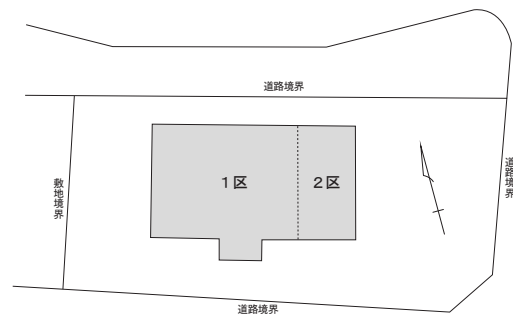


fig.293 調査区配置図

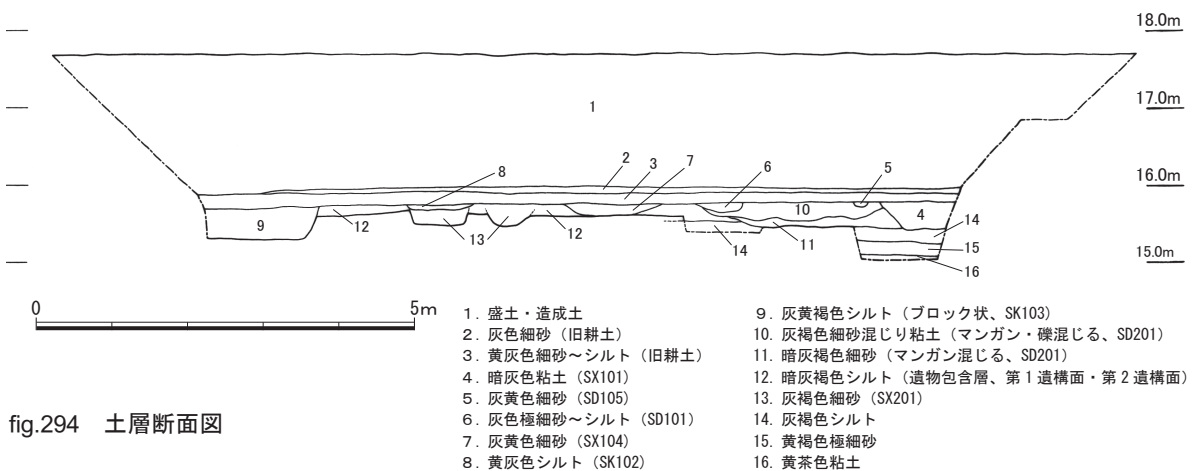


fig.294 土層断面図

第1遺構面

溝、落ち込み状遺構、土坑、ピットを検出した。

SP102 調査区中央で検出したピットである。長径40cm、短径30cm、深さ20cmを測る。土師器・須恵器が出土しているが、詳しい時期は不明である。

SK101 調査区中央で検出した楕円形の土坑である。長軸1.0m、短軸60cm、深さ25cmを測る。埋土には炭層がみられ、土師器皿が1個体出土した。平安時代後期～鎌倉時代の遺構と考えられる。

SK103 調査区南東隅で検出した落ち込みで、深さ40cmを測る。埋土はブロック状の堆積をなしており、短期間のうちに埋められたものと考えられる。中世のものと考えられる須恵器片が出土しているが、詳しい時期は不明である。

SX102 調査区北西隅で検出した舌状の落ち込みである。現状で最大長1.6m、深さ15cmを

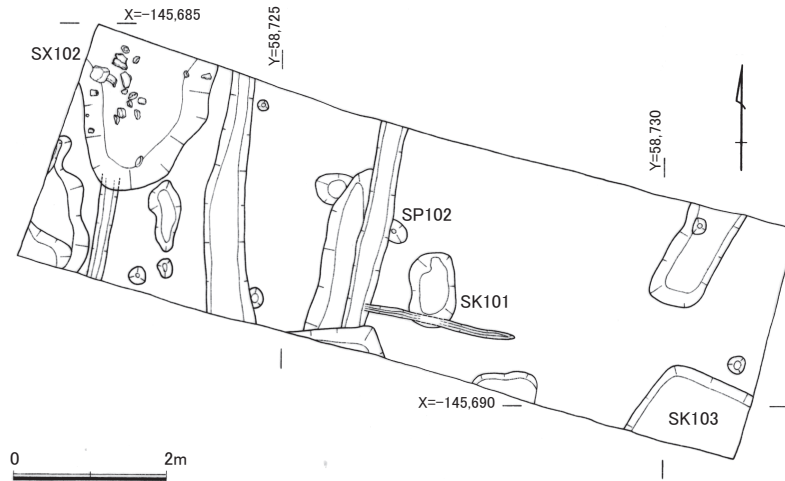


fig.295 第1遺構面平面図

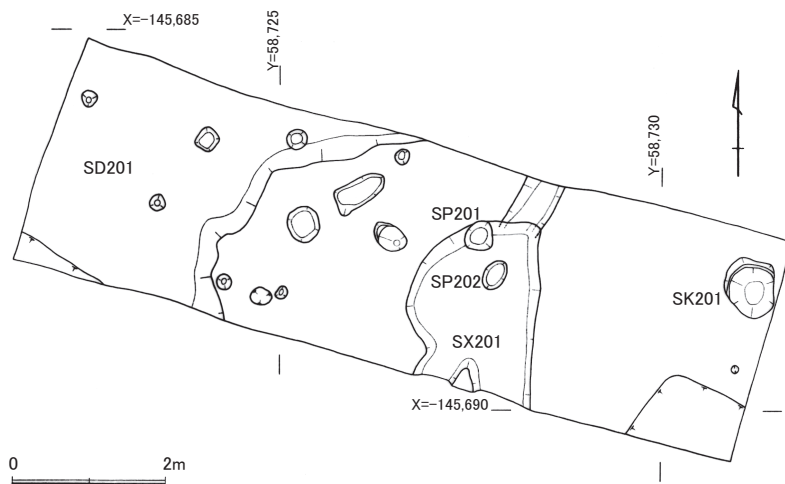


fig.296 第2遺構面平面図

測る。拳大～人頭大の礫とともに15世紀頃の土師質鍋が出土した。埋土中には灰黄色極細砂がマーブル状に散在する。その他に弥生土器・土師器・須恵器が出土している。

第2遺構面

溝、落ち込み状遺構、土坑、ピットを検出した。

SP201 調査区中央で検出した不整円形のピットである。上面をSX201によって切られており、現状で直径40cm、深さ35cmを測る。埋土には炭化物が含まれ、弥生土器が出土した。

SP202 調査区中央で検出した楕円形のピットである。上面をSX201によって切られており、現状で長径45cm、短径25cm、深さ20cmを測る。弥生時代後期後半のものと考えられる甕の破片がまとまって出土した。

SK201 調査区東端で検出した不整円形の土坑である。長径80cm、短径70cm、深さ25cmを測る。弥生土器の細片が出土したのみである。

SD201 調査区西半で検出した深さ25cmの浅い流路状の落ちで、検出最大幅4.6mを測る。埋土にはマンガン粒・拳大の礫が散在し、灰黄色極細砂がマーブル状に入り込む。底面付近から直径0.2mのごく浅いピットが検出されたが、柱穴として捉えうるものはなかった。

SX201 調査区中央で検出した不整形の落ち込みで、最大長2.4m、深さ20cmを測る。北端部ではSD202を、底面付近ではSP201、SP202を切っており、調査区南壁際では中洲状に分岐する。出土遺物に乏しく時期比定が困難である。

3. まとめ

今回の調査では、弥生時代後期～古墳時代、中世の遺構・遺物を確認することができ、概ね第45・46次調査の成果を追認するものであった。

第1遺構面は弥生時代後期～古墳時代、中世の遺物が出土しており、複数の時期の遺構が混在しているものと考えられる。特に、中世に属する遺構は旧耕土直下から切り込んでおり、中世の段階で暗灰褐色シルト（12層）を一部削平していた可能性が考えられる。

第2遺構面は弥生時代後期～古墳時代初頭と考えられる。特に、S P 202は弥生時代後期後半に属するものと考えられ、S P 201についてもその可能性が高い。調査区西側に流路が集中していることから、調査区中央から東側は微高地と考えられ、そこに遺構が形成された様子が見えるが、建物などに復元できるものはなかった。

また、第45・46次調査において検出された竪穴建物S B 1801は、今回の調査区内でも検出されることが予想されたが、後世の遺構によって切られており、確認することができなかった。



fig.297 1区第1遺構面全景（西から）



fig.298 2区第1遺構面全景（東から）



fig.299 1区第2遺構面全景（南東から）



fig.300 1区 SP202 遺物出土状況（南東から）

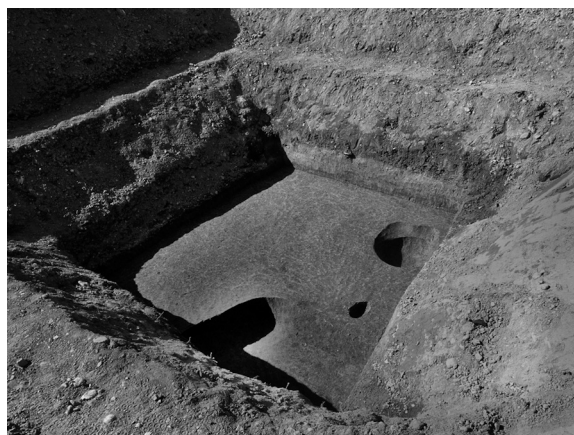


fig.301 2区第2遺構面全景（南東から）

25. 堅田遺跡 第9次調査

1. はじめに

堅田遺跡は、明石川中流域の河岸段丘上に立地する縄文時代から中世までの複合遺跡である。標高 51～55mの地点にあり、明石川と高塚山に挟まれた立地となる。遺跡の範囲は、北は堅田川から南は繁田川までの約 1.1km、東は高塚山の丘陵裾から西は明石川までの約 0.5km の間にひろがる。

明石川中流域の河岸段丘上に分布する遺跡は、東岸域と西岸域に分けられる。東岸域では、堅田遺跡をはじめ、養田遺跡や大畑遺跡などで縄文時代から中世まで集落が連綿と営まれており、堅田遺跡東方の高塚山には、割竹形木棺を主体部とする堅田神社境内 1号墳や直径 5m 前後の円墳が群集する堅田古墳群などが造営されている。西岸域は、常本遺跡や西戸田遺跡などで弥生時代～鎌倉時代の集落址が検出されているが、古墳時代後期に明石川中流域一帯の開発が進むことで、西岸域でも鍛冶関連の遺物が出土した黒田遺跡をはじめ、鍋谷池遺跡や七曲り古墳群など多数の墳墓が丘陵上へ造営されるようになる。

当遺跡では、縄文時代後期前葉の粗製深鉢が出土しているのを上限として、弥生時代中期後半～終末期、古墳時代中期～後期、奈良～鎌倉時代の集落址がこれまでに検出されている。中でも、古墳時代後期と鎌倉時代の集落の検出例が多く、今回の調査地点に隣接する第4次調査では、古墳時代の製塩土器や窯壁状の遺物、スラグなどが出土している。



fig.302 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

今回の調査は、個人住宅の建設に伴うもので、工事によって遺跡が損壊される範囲を対象として発掘調査を実施した。今回の調査地点は、平成4年1～4月に実施した第4次調査トレンチ3から東へ約3mの地点にあたる。

発掘調査は、残土置き場の関係から、調査範囲をA区とB区に分けて実施した。調査対象面積は、敷地面積約245㎡のうち、住宅と擁壁の基礎部分にあたる約197㎡である。

基本層序

現地表面から観察できる地形は、調査区北側が標高53.5m、南側が標高53.4mで、わずかに北から南へ向けて傾斜している。東側と西側の標高は、いずれも53.5m前後だが、東側の山裾から明石川にかけて、ゆるやかに傾斜した地形となっている。

層序は、現地表面から20～70cm前後が旧耕土や造成土などであり、その下層に遺構面が2面ある。

第1遺構面は、調査区東側で検出したSD103を境に土層の特徴が異なる。A区は、暗灰色ブロックとクサリ礫を含む黒色粗砂層(第17層)、B区は、褐色を含む暗灰色粘質細砂層(第15層)である。検出標高は、A区が53.2～53.3m、B区が52.9～53.1mである。両土層から出土した遺物がほぼ同時期の所産であり、検出した遺構面の標高もほぼ同一であることから、両土層が同一時期のものとして判断した。第2遺構面は、灰色粘質土ブロックとクサリ礫を含む黄色細砂層(第19層)である。検出標高は、A区北側が53.1～53.2m、南側が53.0m前後である。以下、各遺構面の概要と調査成果を述べる。

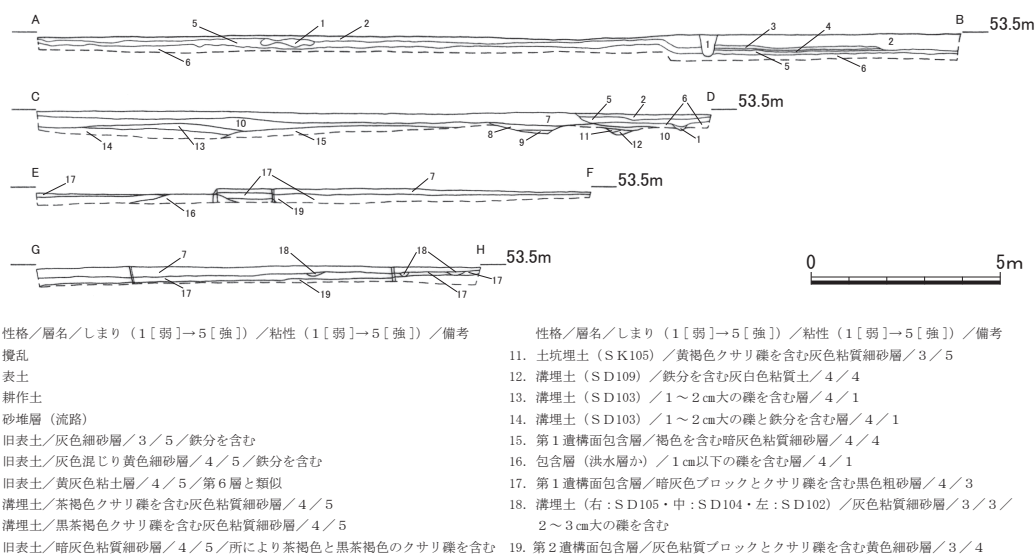


fig.303 土層断面図

第1遺構面

掘立柱建物(SB)1棟、ピット(SP)18基、土坑(SK)7基、溝(SD)10条を検出した。

SB101 東西の側柱が一直線に並ぶことから、建物と判断した。桁行3間×梁行1間で、柱の芯間距離で桁行5.4m、梁行2.4mを測る。桁行1間の幅は1.5～2.1mで、等間隔には並ばない。梁行の幅は2.4m前後であり、全体的にやや歪んだ構造をとる。柱の直径は、20～25cmである。柱穴内からは、下層から混入した遺物を除くと、時期を比定する遺物が出土していない。遺構の切り合い関係からみると、建物の中央には室町時代後期に埋没したと見られるSD101が流れているが、この建物と溝が併存していた可能性は低いとみられる。

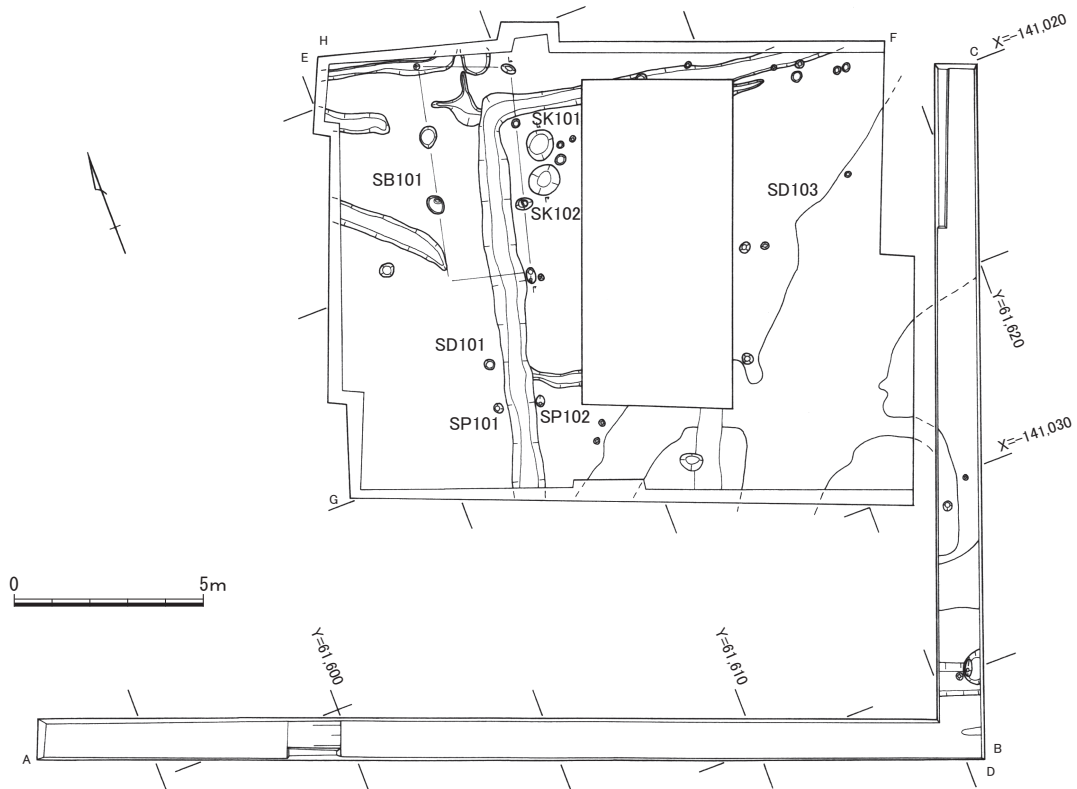


fig.304 第1遺構面平面図

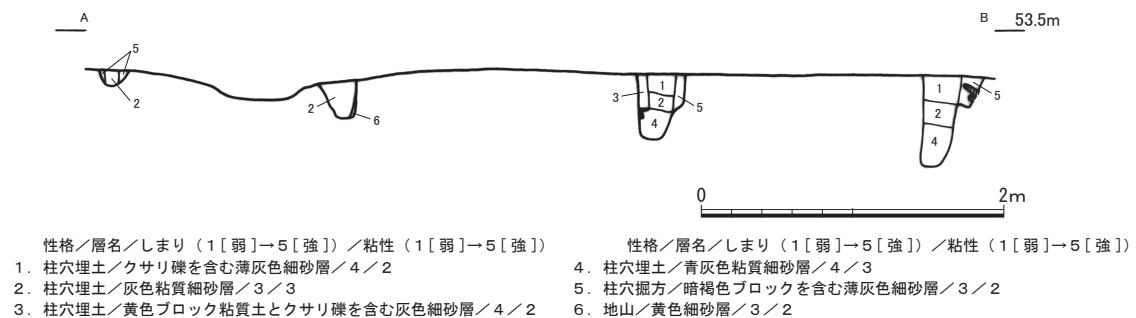


fig.305 SB101 東側柱断面図

ピット SD101 周辺に設置されたものが多く、SP101・102 のようにSD101 を堰き止めていた可能性をうかがわせるものも検出された。ピットの法量は、幅 20～30cm、深さ 10～55cm であり、その多くに柱痕が残存していた。ピット内からは、下層からの混入遺物を除くと、平安時代後期から鎌倉時代前半の土師器が出土しており、鎌倉時代のもが多く見受けられる。

土坑 直径 40～80cm、深さ 30～40cm の不整形な円形を呈するものが多い。特筆すべきは、掘立柱建物の東側で検出したSK101・102 で、この中から焼土と炭が出土している。SK101・102 の法量は、幅 78～81cm、深さ 27～31cm である。土坑底面には、厚さ 15cm ほどの炭が堆積し、その上に赤褐色の焼土塊がブロック状に乗っていた。2つの土坑は並列して設置されており、土坑内に枠を設置した状態で作業していたと考えられる。時期は、鎌倉時代前半である。

溝 A区西側で幅 20～60cm、深さ 20～30cm の東西溝を4条検出した。特筆すべきは、SD103 と、その溝に取りつくともみられるSD101 である。SD103 は、直径 10cm 以下の玉砂利が最大で80cm程度堆積していた素掘りの溝である。埋土から鎌倉時代前半の須恵器が出土している。



fig.306 第1遺構面全景（西から）



fig.307 B区東西トレンチ（南東から）

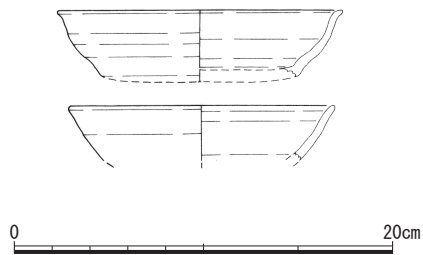


fig.308 第1遺構面 SP103 出土土器実測図



fig.309 SK102・101 遺物出土状況（東から）

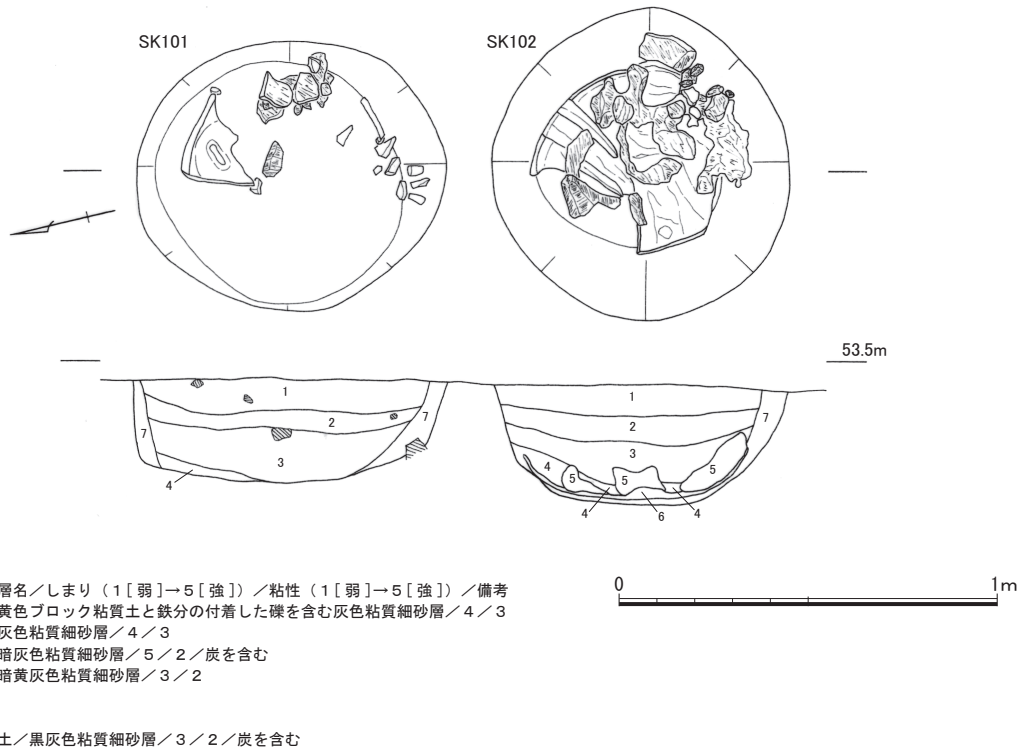


fig.310 SK101・102 平・断面図

SD101は、SD103に取りつくと思われる素掘りの溝である。室町時代後期の羽釜やSK101・102から流出したとみられる焼土塊などが共伴していることから、SK101・102が設置された後に、この溝が開削されたと考えられる。なお、B区東西トレンチからは、SD101・103の延伸部分が検出されなかった。地形的に北から南へ傾斜した立地であることを踏まえると、これらの溝の延伸部分は、B区東西トレンチで今回検出した遺構面よりも下にあるか、途切れている可能性が考えられる。

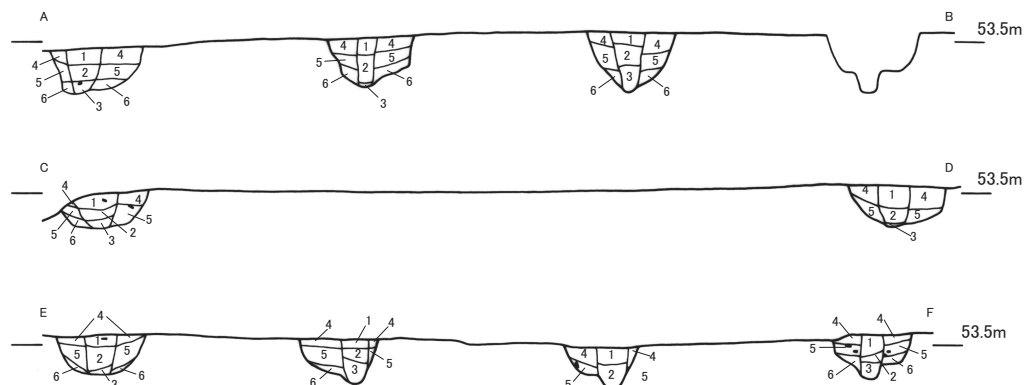
第2遺構面

掘立柱建物（SB）1棟、ピット（SP）27基、溝（SD）4条を検出した。

SB201 桁行3間×梁行2間で、柱の芯間距離で桁行5.2m、梁行3.7mを測る。1間の幅は、



fig.311 第2遺構面平面図



- 性格/層名/しまり (1[弱]→5[強]) / 粘性 (1[弱]→5[強])
1. 柱穴埋土 / クサリ礫を含む薄灰色細砂層 / 4 / 2
 2. 柱穴埋土 / クサリ礫を含む暗灰色細砂層 / 4 / 2 / 礫多量
 3. 柱穴埋土 / クサリ礫と黄色ブロック粘質土を含む灰色細砂層 / 4 / 2 / 礫とブロックは少量
 4. 柱穴掘方 / クサリ礫と黄色ブロック粘質土を含む灰白色細砂層 / 4 / 2
 5. 柱穴掘方 / クサリ礫と黄色ブロック粘質土を含む灰白色細砂層 / 4 / 2 / 礫多量
 6. 柱穴掘方 / クサリ礫と黄色ブロック粘質土を含む薄灰色細砂層 / 4 / 2 / ブロック多量

fig.312 SB201柱穴断面図

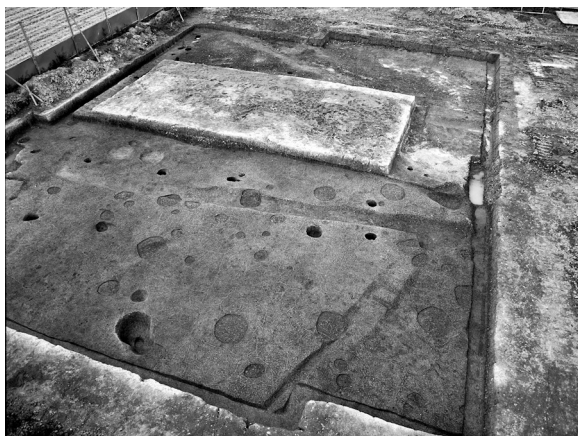
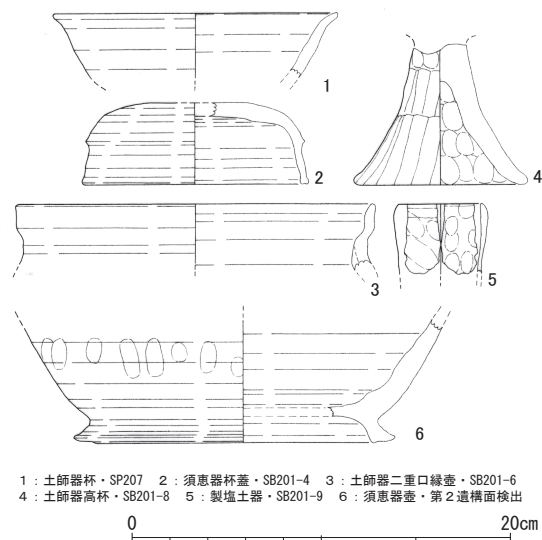


fig.313 第2遺構面（西から）



1 : 土師器杯・SP207 2 : 須恵器杯蓋・SB201-4 3 : 土師器二重口縁壺・SB201-6
4 : 土師器高杯・SB201-8 5 : 製塩土器・SB201-9 6 : 須恵器壺・第2遺構面検出

fig.314 第2遺構面出土遺物実測図

1.7～1.75mである。長軸は、ほぼ真北を向いている。柱の直径は、10～20cmである。柱穴内からは、古墳時代中期後半（TK23～47型式並行期）の須恵器や丸底式の製塩土器などが出土している。

ピット 掘立柱建物の周辺に設置されたものが多い。法量は、直径20～30cm、深さ10～50cmである。掘立柱建物と重複しているピット内からは、土師器坏や製塩土器、須恵器などが出土しているが、それらの時期も古墳時代中期後半～後期前半に比定できる。

溝 いずれも素掘りである。SD201は、掘立柱建物に切られていることから、掘立柱建物が建てられる以前のものであり、溝内からは、丸底式の製塩土器が出土している。この溝の法量は、幅20cm、長さ4mあり、東側に幅10～15cmの南北溝が2条取りつく。

3. まとめ

今回の調査では、2つの遺構面を確認することができた。第1遺構面は平安時代後期～室町時代後期に、第2遺構面は古墳時代中期後半～後期前半にあたる。

第1遺構面は、複数の時期の遺構が重複していることから、この地を継続的に利用していた状況が読み取れる。今回の調査地点と隣接する第4次調査トレンチ2～4・8では、古代から中世までの建物が検出されているが、今回検出した建物も第4次調査で検出された建物と同一の時期である可能性が高い。また、SK101・102から出土した炭と焼土は、建物の東側に隣接して設置されていることから、この建物との関連性が想定できる。また、SD103は高塚山方向から流れてきた流路の一つであることを踏まえると、第1遺構面の集落は、明石川へ向かって流れる小規模な河川沿いに掘立柱建物が点在する形をとっていたのではないだろうか。

第2遺構面では、1棟の掘立柱建物が長軸を真北に向けて建てられていた。第4次調査トレンチ2～4では、掘立柱建物とみられる柱穴が検出されているが、建物の長軸を真北方向に向けた事例は、今回の調査で検出した建物が初となる。柱穴内からは、須恵器をはじめとする日常容器が出土しているが、その中には第4次調査でも出土している丸底式の製塩土器が含まれていた。また、今回検出した掘立柱建物の南側にも、直径50cmほどの掘形をもつ柱穴が検出されたため、調査範囲外にも同時期の掘立柱建物が存在する可能性は高い。今回の調査は、当地域における古墳時代の集落の実態がうかがえる成果となった。

26. 玉津田中遺跡 第41次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は明石川中流域東岸に位置する弥生時代～中世の集落遺跡で、特に、弥生時代の大規模集落遺跡として、広く知られている。

2. 調査の概要

今回の調査は農業用倉庫建設に伴う調査で、平成7年度調査地（第11次調査・污水管敷設工事に伴う調査）〔3トレンチ〕の西側に近接する。調査は工事の影響が及ぶ箇所において、10箇所の調査区（1～10区）を設定して行った。当該地においては、1月18日に試掘調査（T.P.1）を実施しており、古墳時代の遺物包含層を確認している。今回の調査においても、GL-80～120cmで古墳時代の遺物包含層を確認でき、その下層上面が遺構面と考えられる。

基本層序

現代盛土、旧耕土層、シルト層及び砂礫層、遺物包含層、基盤層で、基盤層上面は、H=19.8～20.0mを測る。

遺構

4区において小規模なピット1基、6区において小規模な土坑状遺構を確認した程度で、遺構埋土からは遺物は確認できなかった。

遺物は遺物包含層内からの出土のみで、いずれも土器の小片である。弥生土器、土師器、須恵器を確認したが、土師器、須恵器が多い。

3. まとめ

今回の調査においては、調査区域が狭小であることから、成果としては乏しいが、第11次調査（平成7年度）で確認された遺構面が連続することが明らかになり、集落の広がりを確認することができた。今後の周辺における調査の指針となりうる成果と考えられる。

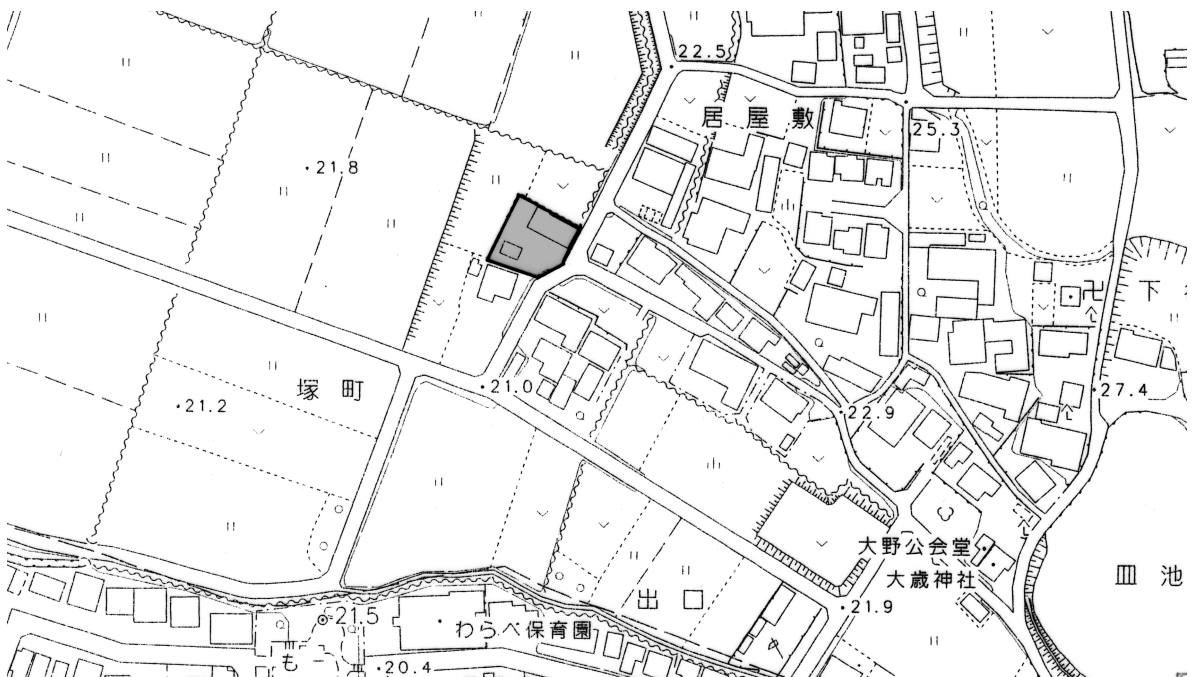


fig.315 調査地位置図 1:2,500

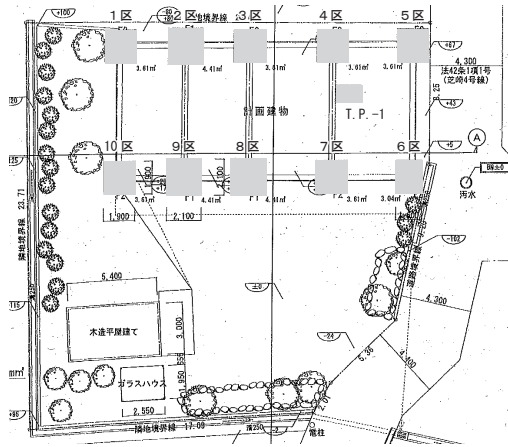


fig.316 調査範囲図



fig.317 調査地（南西から）



fig.318 4区（南から）



fig.319 6区（北から）

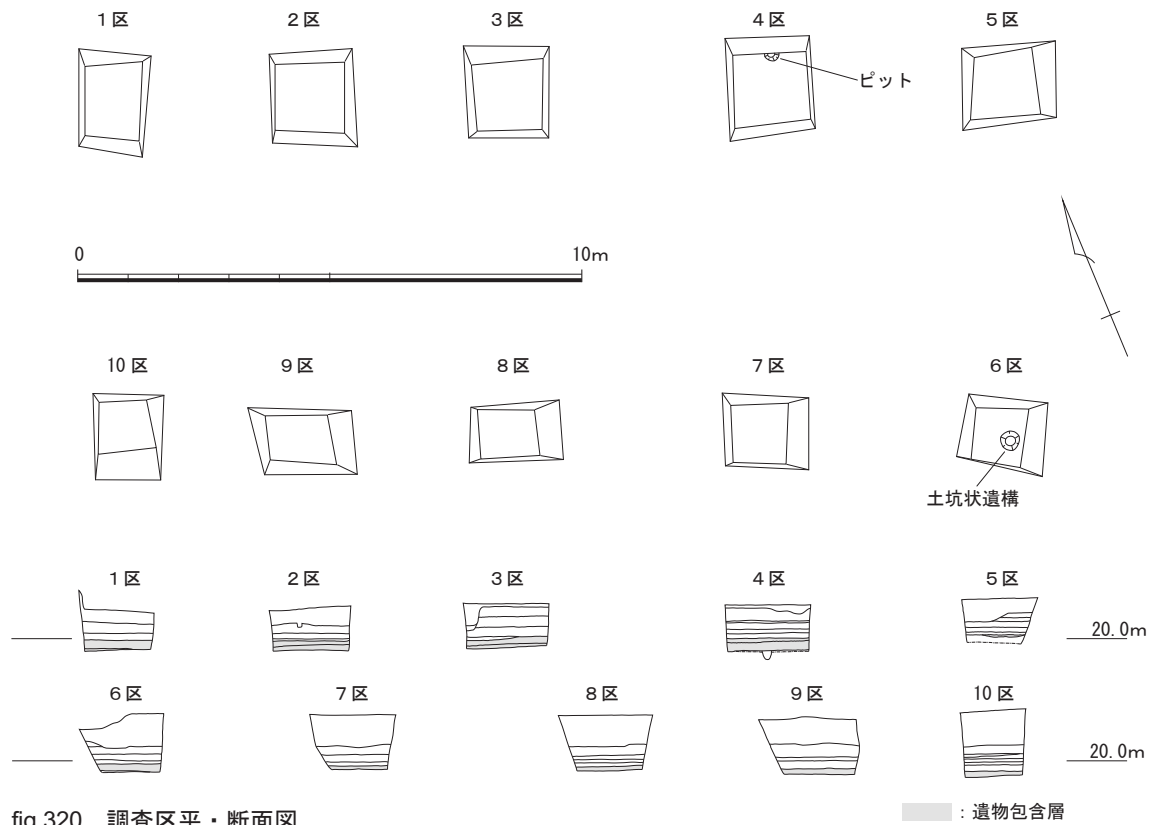


fig.320 調査区平・断面図

■ : 遺物包含層

平成27年度 神戸市埋蔵文化財年報

平成30年3月 印刷

平成30年3月 発行

発行 神戸市教育委員会文化財課

神戸市中央区加納町6丁目5番1号

TEL 078(322)5799

印刷 有限会社つくしコーポレーション

TEL 078(974)8017

神戸市広報印刷物登録 平成29年度 第647号 (広報印刷物規格 A-6類)